

愛媛大学教育学部

第142号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番

愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com



ご挨拶



愛媛大学教育学部
同窓会会長

井上 洋一

初夏の候、同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝にて活躍のこととお慶び申し上げます。平素より愛媛大学教育学部同窓会の活動に格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今号の会報を手にした皆様は、巻頭の写真と名前が急に変わっており、さぞかし驚かれたことと存じます。先日の支部長会におきましてご承認をいただき、今年度より新しく同窓会会長に就任いたしました、井上洋一と申します。伝統ある本同窓会の会長という大役に、身の引き締まる思いでおります。

私にとっては、皆様に向けた初めての巻頭挨拶となりますため、まずはこの誌面をお借りして、自己紹介をさせていただきたく思います。

私は、一九八〇年に愛媛大学教育学部特別教科(音楽)教員養成課程、いわゆる「特音」に入学いたしました。高校時代からご指導をいただいていた横山詔八先生の研究室に所属し、作曲の奥深さに魅了され、音楽に没頭する充実した日々を過ごしました。卒業作品として書き上げたのが「十二楽器のためのディベルティメント」という楽曲です。これは管弦楽器とシンセサイザーのためのアンサンブル曲であり、新しい音楽の可能性を模索しながら若き日の情熱を注ぎ込んだ日々は、今でも私の音楽人生の原点として色褪せることなく胸に刻まれております。

一九八四年に大学を卒業した後、大洲市・八幡浜市の中学校にて、音楽科教諭として十七年間教壇に立ちました。その間、兵庫教育大学大学院へ二年間派遣される機会にも恵まれ、より深く教育実践を探究することができました。

その後、愛媛大学教育学部附属中学校に七年間勤務いたしました。実は、この附属中学校での後半の四年間、校長を務めておられたのが、前会長の高橋治郎先生でいらっしやいました。今こうして、高橋先生から同窓会会長のバトンを引き継がせていただくことになったのも、あの時から逃れられない不思議なご縁、あるいは一種の「宿命」であったのかもしれない。

中学校教諭時代は、特に音楽科における創作指導に力を入れてまいりました。生徒たちが自らの手で音を紡ぎ出し、表現する喜びを知っていく姿を見ることは、教員としての何よりの喜びでした。また、音楽部の顧問を務め、休日はほとんどない、生徒たちと真っ直ぐに向き合う生活を送っておりました。同じ目標に向かって一丸となり、コンクールという大舞台に挑戦し、共に泣き、共に笑い合った思い出は、今となつては懐かしい、私の人生におけるかけがえない宝物です。

二〇〇八年からは、母校である教育学部音楽教育講座の専任講師として任用され、音楽デザインや音楽科教育を専門領域として教育・研究活動に携わってまいりました。また、本学の大学院が教職大学院へと改組されるにあたって、これまでの二十四年にわたる現場での実務経験があることから、初年度より実務家教員として大学院も兼担しております。また、二〇二一年四月から本年

の三月まで、附属幼稚園の園長を務めさせていただきました。就任時はコロナ禍真っ只中であり、保育の現場はこれまでになく厳しい状況でしたが、孫のように愛らしい園児たちの、屈託のない輝くような笑顔と溢れる生命力に、私自身が幾度となく癒され、救われた毎日でございました。

今年度からは、放送大学の客員教員を兼業しております。先日の面接授業では、七十代後半の学生さんも熱心に受講しておられました。実のところ、私は今年度をもちまして定年退職を迎えます。自身の教員生活の最終章において、三歳の無邪気な幼児から、八十歳近くの人生経験豊かな方々に至るまで、これほどまでに幅広い世代の教育に携わることができました。学ぶことへの情熱に年齢は関係ありません。人は生涯にわたって学び続けることができる存在であるということ、私自身があらためて強く実感しております。

長年教育の現場を支え、多大な貢献をしてこられた大先輩の皆様が数多くおられる本同窓会におきまして、会長という立場ではございますが、皆様の豊かなご経験や深いお知恵に触れ、私自身もまた多くのことを学ばせていただきましたと切に願っております。どうぞよろしく願いいたします。

表紙

「キラキラ帰り道」……勝間田亜海

題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫

「ご挨拶」……(1)

教育学部同窓会会長 井上 洋一

心 響……(2)

「愛媛大学教育学部と私」 越智 政英

研究室紹介……(3)

人文社会科学系研究室(英語教育) 立松 大祐

職場だより……(5)

言葉にこだわる

新居浜市・中萩中教諭 西原菜穂子

子どもたちとともに歩み始めた一か月 今治市・日高小教諭 木山 仁乃

出合いに支えられて 松山市・拓南中教諭 林 果穂

子どもの笑顔を原動力に 伊方町・伊方小教諭 比企愛里紗

見えにくい変化を信じて 宇和島市・城南中教諭 相原 遥

子どもたちとともに 松山市・愛大教育学部附属幼稚園 松澤 絢子

学部トピックス……(11)

愛媛大学教育学部附属特別支援学校 高等部の生徒たちが「財政教育プログラム」に参加しました

目次

愛媛大学教育学部と私

同窓会理事

今治市立大西小教諭



越智政英

(平六卒)

ふと気が付けば、教員生活も三十年を超え、いつの間にか経験だけはベテ

ランという域に達してしまった。人と比べて、特に抜きんでたところがあるわけではない、むしろ失敗やうまくいかないことの多かつたこれまでの教員人生ではあるが、それでも何と今ままで続けていくことが出来たのは、周囲の方々の温かい支えがあつてこそだと心から思う。多大な迷惑をかけたことも、おおらかな心で受け入れてくださった先輩や同僚、保護者の皆様には、本当に頭が上がらない。さらに、在学中はもちろん、卒業後も大きなサポートを与えていただいた愛媛大学教育学部とのつながりも、忘れてはならないことの一つだと感じている。

そこで、紙面を借りて自分と愛媛大
学教育学部とのつながりを中心にこれ
までを振り返ってみたい。

学生時代は、恥ずかしながら、熱心に勉学に励むような学生とは言えなかった。小学校教員になるという思いは強かったが、とにかく最小の労力で教員になれるさえすればよいと考えていた。授業も必要最低限を選択し、免許の取得も小学校の一種のみに絞り、あえて他の免許を取らずにすむ方向を模索した。三回生では九月に愛媛大学教育学部附属小学校での実習を終え、ゆつくり実家で過ごす予定を立てていた。

十月に他の学生が二種免許の実習を行う頃、不幸にも実家へ向かう途中、原付スクーターで信号待ちしていた乗用車に追突し、脾臓破裂で即手術、入院

後期の授業が始まるまで、誰にも気づかれないという悲しい結果に終わった。

そんな学生だったが、教員大量採用時代の最後の年に、運を味方につけて採用試験に合格し、小学校教諭として赴任する。初任者研修も何とか乗り切り、晴れて本採用となった。

その後しばらくは、愛媛大学教育学部卒業という肩書以外では、特に愛媛大学を意識することなく、学級担任として悲戦苦闘の毎日を過ごした。

教員生活九年目に、転帳が訪れる。特別支援学級の担任である。少人数で、生活学習など通常学級とは異なる。教科を合わせた指導もある。未知の領域にとまどいながらも、同じ特別支援学級担任の先生に、指導法や具体的な授業の進め方を教わりながら、数年を過ごした。児童にじつくりと向き合うことができ、教育課程も児童に応じて柔軟に対応できる。他校と触れ合う機会が多い行事への参加もある。ちやうど発達障害が注目され始めた頃で、閉症児に対する支援方法もよく話題に



なっていた。

こうして特別支援教育に携わる中、さらに専門的な知識を身に付けたいた、特別支援教育に関する免許を取得したいとの思いが、ふつと沸き上がってきた。勉強嫌いな自分の性格を考えても不思議なことだが、それほど自分にとって特別支援教育は奥が深く、通常学級とはまた違った魅力的な分野であった。初任者指導の先生から、「教員生活を続けていく上で、人に負けない専門の教科をもつと、自分の武器に

なるよ。」と教わった言葉も、今になって自分にとっての専門分野が特別支援教育だったなあと思う出される。

そして、志願した愛媛大学教育学部特別支援教育重複障害コースの専攻科への内地留学が認められた。教員という立場での二度目の学生生活は新鮮で、現役の学生とともに講義を受けた

り、同じ専攻科の先生たちと話し合ったりする毎日とは、とても充実していた。毎日の講義では、特別支援教育に絞った様々な内容に興味を覚えながら受講した。

した。先生方の個性的な語り口による生き生きとした知識が、次々と頭に入っていく。吸収しきれず容量を超えてしまふことも多かったが、それでも何とか溢れ出さぬよう自分なりに必死だった。外部講師を招いての集中講義では、最新の研究についての知識が得られた。また、教育実習では、愛媛大学教育学部附属特別支援学校で多くの先生方にお世話になり、実践を通して様々な教えを乞うことができた。特に、自閉症については支援方法を学ぶ貴重な機会となった。

専攻科での一年間の生活を終え、再び特別支援学級担任として現場復帰する。専攻科で学んだことにより、少し自信を得たが、同時に理論を実践することの難しさについても改めて実感した。頭で分かっていることと実際に行動に移すことができることは別物であることを身をもって感じながら日々を過ごした。

さらに数年後、交流として鼎立今治特別支援学校への異動が決まる。教育実習で特別支援学校での生活を経験済みとはいえ、小学校とは全く異なる生活に驚く毎日であった。小学部に配属され、チャームがない、教科書の重い授業を行う毎日をカルチャーショックとともに過ごした。

三年後、再び市内の小学校に赴任する。その赴任校で研究授業を行うこと

になり、ここで再び愛媛大学教育学部
の先生に協力を依頼することとなっ
た。自分の苦手なＩＴを活用した授業
を組み立て、助言をいただくことで、
無事に多くの先生方に授業を見てい
ただくことができた。

その後、一校を経て、愛媛県教育委員会特別支援教育課で一年間お世話になり、コロナ禍で一斉休校という前代未聞の騒動の最中、かつて教育実習でお世話になった愛媛大学教育学部附属特別支援学校へ異動となる。

縁とは不思議なもので、教育実習や今治特別支援学校でお世話になった数々の先生方とも再会することができた。かつては学生として訪れた学校で、今度は指導する立場として勤務している。この学校では、六年間お世話になった。

振り返ると、自分の教員生活の転機には、望むと望まざるとに関わらず、愛媛大学がかかわっていたことに驚いている。卒業時には、まさか教員になった後も、これほどお世話になるだろうとは夢にも思わなかった。しかし、今見つめなおすと、愛媛大学教育学部とともに教員生活歩んできたと言っても過言ではないと感じる。

私の例は、特別なケースかもしれないが、もし、教員生活で困ったとき、悩んだ時、研究にいきまづったとき、仲間や先輩方と話したいときなど、現役・OBに関わらず様々な機会を提供していただくことができる愛媛大学教育学部をみなさんも積極的に活用してみたいかがだろうか。私自身この紙面をいたかだころは、愛媛大学教育学部の同窓生のつながりを今以上に活性化させるためだと受け止めている。

まずは、毎年恒例のホームカミングデー、そして隔年開催の教育学部同窓会に顔を出してみることをお勧めします。懐かしい仲間や恩師に再会でき、新たな活力を得られることを保証します。

- 令和八年四月十六日に教育学部と附属学校の先生方による愛媛大学教育学部合同研修会が開催されました。
- 教育学部中庭に設置されている師道鑑仰之碑と石井素胸像

先輩を偲ぶ……………

(13)

同窓会事務局
会員の声……………(15)

・大拙・英訳「教行信証」の研究(四)
..... 吉原 宏文

表紙の作品について……………(16)

令和八年度支部長会報告……………(17)

役員表……………(19)

事業・決算報告……………(20

同窓会会則……………(21)

支部活動支援金交付について……………(22)

サークル紹介……………(23)

フ
ア
✓
ミ
ス
レ
ハ
シ

[illegible]

5) (2)

又熱改弓

裏表紙……………27)

思い出原稿募集

準会員作品紹介



研究室紹介

人文社会科学系研究室(英語教育)



教授 立松 大祐 先生

英語を使って考え、伝え合う学び

「英語の授業なのに、生徒たちが夢中になって話し合っている。」そんな授業づくりを目指して、私は「リテラチャー・サークル(以後、LCと表す)」という言語活動の研究と実践に取り組んでいます。私は二〇一二年にアメリカのデンバーで、現地の先生からの言語活動を教えてもらいました。LCとは、同じ英文を読んだ生徒たちが、四から五人のグループで読みの役割を分担して、英語で話し合う活動です。アメリカで開発された指導法を日本の英語教育に応用しようとしています。英語教育では、「読む」「聞く」「話す」「書く」を別々に学ぶだけで

なく、実際のコミュニケーションの中で統合的に使う力が求められるています。LCでは、「読むこと」を起点として、「聞くこと」「話すこと」「書くこと」を結び付けながら、生徒が英語を使って考え、伝え合う学びを目指しています。授業では、教科書本文や物語教材を用いながら、基本的には四つの役割を設定しています。本文を要約する役割、印象に残った場面を絵や図で表現する役割、問いを考える役割、自分の経験や社会の出来事と関連付ける役割です。英文のジャンルによっては、本文内容に関連する調査をする役割を加えることもあります。生徒は「自分の役割準備がグループの学びに

つながる」という責任感を持ち、何度も本文を読み返ししながら活動に取り組みます。

本言語活動は、①全員での質問づくり、②役割準備、③ミニ・レッスン、④ジグソー学習、⑤話し合い活動、⑥振り返り・報告、という流れで構成しています。例えば、①全員での質問づくりとは、クラスの全員が本文内容について

の問いを考えます。「なぜ登場人物はそのような行動をしたのか」「自分ならどうするか」といった問いを作ること、内容を「自分ごと」として捉えることができます。また、④ジグソー学習では、同じ役割ごとに生徒が集まり、情報交換と教え合いを通して、自信を持ってグループの話し合いに参加できるようになります。

なぜLCは楽しいのか？

LCの大きな特徴は、教科書の英文を「思考と表現のための資源」として活用できる点にあります。生徒たちは話し合いのために本文を繰り返し読みます。自分の考えを英語で伝えるために語句や表現

を吟味するなかで、読むこと・話すこと・聞くこと・書くことが相互に結び付きます。こうした過程を通して、生徒は英語を用いて考え、根拠を持って伝える力を育みます。つまり、教科書本文が「アウトプットのためのインプット」として機能し、生徒が英語を使って考え、伝え合う授業への転換につながるのであります。

この活動のおもしろさは、生徒同士の対話によって新しい視点や発見が生まれることです。最初は英語で話すことに消極的だった生徒が、「もっと話したい」と発言する姿に出会うことがあります。また、「そんな考え方もあるのか」「自分とは違う感じ方だ」といった驚きや発見の歓声が上がリ、教室には楽しく温かい雰囲気醸成されます。この経験は、英語力だけでなく、多様性を理解し他者を尊重する姿勢の育成にもつながり、「英語で話したい」「もっと考えたい」「次のLCでは、自分の意見や気持ちをもっと伝えたい」という内発的な学びを促す点に大きな価値があると考えます。

これらの実践は、教育学部附属

中学校の先生方との協働を起点として、現在では松山市をはじめ県内の学校現場へと広がっています。現職教員の先生方と授業研究や研修会を継続的に行い、実践の共有と指導法の改善を重ねてきました。近年は、異なる地域の学校を結ぶオンラインLCも実現し、対話的な学びの可能性をさらに拡張しています。こうした実践の一部は愛媛新聞(二〇二四年三月六日)や南海放送ラジオ「坂の上のラジオ」(二〇二四年五月十一日)でも紹介され、研究と実践が地域社会にも価値を持つ取組として発信されてきました。学校現場の先生方との協働は、研究を教育改善へとつなぐ基盤であり、先生方の支えに深く感謝しています。

これからの研究の方向は

最近では、LCの学習プロセスにおけるAI活用について研究を進めています。具体的には、AIとの英会話練習、英語表現へのフィードバック、話し合い前のアイデア整理などを通して、生徒がどのような支援を受けることで、自信を持って対話に参加し、思考

を深められるのかを検証したいと考えています。あわせて、「単元内自由進度学習」という学習方法と組み合わせることで、生徒が自分の理解度や準備状況に応じて学習を進めながら、協働的な話し合いにも主体的に参加できる授業モデルの構築を目指しています。

さらに今後は、教育学部附属才能教育センターの知見を取り入れた指導法を開発したいと考えています。子どもたちは、それぞれ異なる興味・関心や学び方の特性を持っています。英語が得意な生徒、創造的な発想に優れた生徒、深く思考することを好む生徒など、多様な学習者が存在します。一人ひとりの強みを生かし、一人ひとりに合った学びと協働的な学びを両立させる英語授業を実現したいと考えます。

留学生と学ぶ合う授業

次に、学部での教育活動について少し紹介します。同窓会報第一四〇号で紹介いただいたとおり、「英語教育実践研究」では、英語教育に関する専門書や実践事例を読み、日本語と英語によるプ

レゼンテーションやディスカッションを行っています。この授業には教員留学生も参加しており、各国の英語教育事情について直接学べることも特徴です。これまでにフィリピンやジンバブエからの留学生が参加し、学部生と英語教育について意見交換を行うなど、教室の中にも小さな国際交流が生まれています。学生たちは、異なる文化的背景を持つ留学生と学ぶことで、「英語を学ぶ」だけでなく、「英語で学ぶ」経験を積み重ねています。

シアトルでの教育実践研修

教育活動の一つとして、ワシントン大学ボセル校・シアトル校での研修を実施しています。二〇一一年度に小助川元太先生、竹永雄二先生、David Bogdan先生が開発してくださった研修です。その担当を私が引き継ぎ、二〇二五年度までに通算十二回の学生派遣を行い、参加した学生は累計百十一人にのびります。この研修プログラムは、毎年内容に見直しを加えながら、アメリカ社会の多様性について学ぶとともに、

シアトル近郊の幼・小・中・高・大の学校やNPO団体などを訪問し、教育実践体験や文化交流を行っています。

研修に向けた事前学習に力を入れており、学生たちは英語で現地機関について調査し、プレゼンテーションを行います。また、現地の学校（昨年度は九校）で実施する「松山紹介」「俳句ワークショップ」「折り紙ワークショップ」「盆踊り」などの日本文化ワークショップを、グループで協力して準備しました。

実際に現地でも子どもたちや大学生と交流したり、ホームステイをしたりする経験は、学生にとって非常に大きな学びとなっていました。英語力だけでなく、多文化理解、協働性、自己表現力など、多面的な力が育成されています。



UWB研修

CLCでの英語教育研修



シカゴ市内（CLC研修）

カレッジ・オブ・レイクカウンティ（CLC）での研修は、小中高等学校で英語を教える学生の英語コミュニケーション能力向上と英語指導法を学ぶことが目的です。二〇二五年九月に七人の教職大学院生と学部生を派遣しました。現地の大学教員から指導法を学んだり、小学校で授業観察を行ったりしました。また、日本文化ワークショップも準備し、大学の留学フェアに参加して愛媛の魅力や愛媛大学についてプレゼンテーションをしました。

これらのアメリカでの教育実践体験と学校訪問、学生交流は、将来教員を目指す学生にとって、自分自身のキャリアについて改めて考える機会にもなっています。

おわりに

英語教育は、文法や語彙などの言語形式を教えるだけでなく、英語を使って考え、他者と伝え合い、多様な価値観に触れながら自分の考えを形成していく教育です。これからも、LCをはじめとする対話的な学びの研究と実践を通して、一人ひとりの可能性を引き出す授業づくりを探究するとともに、学校現場に還元可能な指導法を発信し、地域と社会に開かれた英語教育の発展に貢献していきたいと考えています。今後とも、同窓会のみならず温かく見守っていただければ幸いです。



修了パーティー（UWB研修）

職場だより



言葉にこだわる



新居浜市
中萩中教諭
西原菜穂子
(令三卒)

「言葉にこだわる」というのは、附属中学校の教育実習で指導してくださった先生が仰っていたことだ。「言葉に注目し、言葉にこだわる」ことができたなら、国語の授業はそれで良いんだよ。」当時、教材研究で悩み、発問をどうしようか、どのような展開にしようかとあれこれ考えるうちに雁字搦めになっていた私は、先生のこの言葉を聞いて、ふっと肩の力が抜けたことを覚えている。そして今でもこの言葉を思い出す。国語科教員として向き合い続けるべき重みのあるこの言葉を。

昨年私は、市の学力向上研修会で国語の研究授業を行った。中学校三年生、受験を控える中で、授業時数が気にながらも、思い

切って七時間かけ、井上ひさしの『握手』を読んだ。授業を考える中で、ずっと頭にあつたのは「言葉にこだわる」ことだ。作品に書かれている言葉に立ち止まり、「なぜ」と疑問に思うこと。そこから読みを広げる授業を目指した。市内の国語科の先生や、学校司書さん、ICT支援員さんに背中を押され、単元のめあては、「学習課題の解決を通して、登場人物の生き方や作品の主題に迫ろう。」とした。学習課題は、『握手』を読んだ疑問に感じたことを出発点とし、生徒一人一人が自分で設定したものだ。研究授業の助言をしてくださった先生が、「どんな課題でもいい。読み解いていくとどこかで作品の主題につながるかもしれないから、全部大事にしよう。」と仰ってくださったこともあり、生徒の生の疑問がそのままの形で学習課題となっていた。『なぜマイケル先生を作品に登場させたのだろう。』『なぜルロイ修道士は病気のことを隠して会って

いたのだろう。』『題名が『指言葉』ではなく、『握手』なのはなぜだろう。』……。課題を解決するために、生徒は教科書の文字を指でなぞりながら何度も何度も読み返し、話し合い、夢中になって読んだ。私自身も生徒から疑問が出てくる度に、「その視点で読んだことなかった！ もう一度読ませて！」という気付きの連続だった。中でも印象に残ったのは「ルロイ修道士は病気で食欲がなく、オムレツをちつとも口へ運んでいないのに、『おいしいですね』と言ったのはなぜか。」という学習課題である。生徒は、ルロイ修道士が教え子と再会している時の描写を踏まえ、「自分が育てた教え子と再会し、最期の時間を一緒に過ごせていることが嬉しくて、食べていなくてもおいしいと感じていたのではないか。」と述べた。きつとその生徒は、誰かと食事をする楽しさ、おいしいねと言合えることの嬉しさを生活の中で知り得ているのだ。だからこそ、ルロイ修道士の「おいしいですね」という言葉が目に残り、作品の言葉を自分の経験と重ね合わせながら読むことができたのだろう。「言葉にこだわる」生徒の姿が目の前

で見られたことが本当に嬉しく、感動した。

「言葉にこだわる」授業は、学力向上研修会の研究授業以降も続いた。魯迅の『故郷』の授業をした時、ある生徒は、「疑問を解決する手掛かりとなる文は教科書中にあるが、自分たちの価値観や思いを乗せて解釈し直したい。」と言った。またある生徒は、『握手』も魯迅の『故郷』も再会と別れがテーマだと気付きました。もう一度主題を考えながら読み直したいです。」と言った。三年間持ち上がった学年で、私の拙い授業にも面白いと言いが付き合ってくれた生徒たちが自らそんなことを言うなんて……。『言葉にこだわる』ことに全力投球してきた日々、確かな手応えを感じた瞬間だった。

言葉に注目し、向き合うことで、作品の新たな魅力やおもしろさに気付くことができる。また、受け取り手の思いや今まで経験してきたこと、価値観が言葉と合わさり、解釈となつて述べられた時、受け取り手がこれまで歩んできた人生を感じ取れることもある。あの時の実習で先生が仰っていた、「言葉にこだわる」の意味が、自分の

中で更に深くなっている。

今回、同窓会報を書くにあたり、七年前に受けた教員採用試験の面接対策ノートを見返してみた。「なぜ国語の先生になりたいのですか。」という質問に対し、当時の私はこう答えていた。「一つ一つの言葉に注目し、こだわる体験を生徒と共にしたいからです。同じ言葉でも受け取り手によって多様な解釈が生まれるため、それを授業で共有することで、さらに深い解釈につながるといふ魅力を生徒と味わいたいです。」

私の国語の授業の原動力となっている「言葉にこだわる」ことを、これからも生徒と共に追究していきたい。



子どもたちとともに 歩み始めた一か月



今治市

日高小教諭

木山 仁乃
(令八卒)

教員として着任してから、一か月と少しが経とうとしている。小学生の頃からの夢であった小学校教員になり、「いつか自分も担任として子どもたちの前に立ちたい」と思っていた日々が、今では現実となり、毎日慌ただしくも充実した時間を過ごしている。現在は、四年生の担任をしており、子どもたちとともに学び、悩み、笑い合いながら、一日一日を積み重ねている。

着任したばかりの頃は、不安と緊張でいっぱいだった。初めて教室に入り、子どもたちの前で自己紹介をしたときのことは、今でも鮮明に覚えている。どんな学級になるのだろうか、自分は子どもたちにとってどのような先生になれるのだろうかという思いが、頭の中を巡っていた。しかし、子どもたちは私の想像以上に温かく、「先生の好きな食べ物？」と一緒に

昼休み鉄棒をしよう」などと、話しかけてくれた。その姿に緊張がほぐれ、少しずつ自然体で関わる事ができるようになってきた。

一か月間を振り返ると、毎日が学びの連続だった。授業づくり一つをとっても、大学で学んだことをそのまま実践するだけではうまくいかず、子どもたちの実態を踏まえながら工夫することの大切さを実感した。説明をしても思うように伝わらなかったり、予定していた活動が時間内に終わらなかったりと、失敗することの方が多かった。それでも、子どもたちが授業中にたくさん発表をしてくれたり、授業後に声を掛けてくれたりすると、大きな励みとなった。

特に印象に残っているのが、子どもたち同士の関わりである。四年生になると、自分の考えをしっかり持っている子が多く、友達と協力しながら学ぶ姿勢が見られる。私のクラスには、四月に男子児童の転入生が、フィリピンからやってきた。その子は、母国語がタガログ語であるため、日本語を話したり、聞き取ったりすることはできず、英語なら少し分かるということだった。英語の副免許を取得していた私は、大学四年間で培ってきた英語力を活かすことが

できるかもしれないと、意気込んでいた。だが、現実はどううまくはいかず、簡単な英語で学校生活の諸々について伝えることはとても難しかった。そのため、翻訳機を使用しなければ、コミュニケーションを取ることができない状況になっていた。しかしある日、クラスの男子児童数名が、ジェスチャーを用いて、その転入生を昼休みの外遊びに誘っているのを見かけた。さらには、英語で会話をしたいからという理由で、簡単な英語のフレーズ集を購入する子や、私に直接英語を尋ねに来る子が何人かいた。私は、子どもたちの素直で純粋な様子に、心がとても温かくなった。同時に、言語が通じなくても、積極的に転入生と関わろうとする子どもたちを見て、担任として背中を押されたような気がした。

現在、本校では運動会の練習が本格的に行われている。子どもたちは毎日汗を流しながら、一生懸命練習に取り組んでいる。表現の練習では、最初は動きを覚えることに苦戦していた子も、友達同士で教え合いながら、少しずつ上達していく姿が見られる。休み時間にも、「もつと上手になりたい」と自主的に練習をする子どもたち

の姿から、行事に向かう意欲の高さを感じている。私自身、運動会の練習に関わる中で、教員として多くのことを学んでいる。子どもたちをまとめることの難しさや、限られた時間の中で安全に活動を進めることの大変さを感じる一方で、一つの目標に向かって、学級がまとまっていく喜びも感じている。子どもたち同士で声をかけ合う様子も見られ、日々少しずつ成長しているのだなと感じた。

授業に関しては、一人一台端末を活用した授業も日常的に行っている。算数科の授業では、「折れ線グラフ」の単元において、デジタル教科書を用いて授業を行っている。子どもに、電子黒板に直接グラフを書かせることで、グラフの書き方を定着させるとともに、授業への動機付けを図っている。子どもたちは機器の操作にも慣れており、楽しみながら学習に取り組んでいる。ICTの活用によって、一人一人の考えが可視化され、互いに学び合う場面が増えていくと感じている。ICTの活用能力に関しては、まだまだ未熟な点が多いため、これから様々な経験を重ねていきたい。

この一か月を通して、教員という仕事は、決して一人ではできない

い仕事であると強く感じている。学年団の先生方など、多くの先生方の支えがあったからこそ、教員としての初めての一か月を歩むことができた。授業準備や学級経営に関することで悩んだときには、温かい助言をいただき、たくさんの方で支えていただいていることを実感する。そのことから、子どもだけでなく、教員同士のつながりも、学校には欠かせないものであると学んだ。

まだ教員生活は始まったばかりで、目の前のことで精一杯になることもある。しかし、子どもたちの笑顔や、「先生できたよ!」という言葉に、大きなやりがいを感じている。子どもたちは、日々成長しており、教員である私もまた、子どもたちから多くのことを学ばせてもらっている。苦手なことも最後まで挑戦するような姿を見ると、子どもたちの可能性の大きさを感じる。これからも、一人一人の思いに寄り添いながら、子どもたちとともに、学び、成長していくことのできる教員を目指して、努力していきたい。



出会いに支えられて



松山市

拓南中教諭

林 果穂

(令五卒)

昨年度、私は初任者として初めて小学校三年生の学級を受け持ちました。これまで大学等で学んできたことを教育現場での実践に移す日々は、想像以上に難しく、学級経営や授業づくり、子どもたちとの関わり方など、どれをとっても手探りの連続でした。目の前のことに精一杯で、「これでよいのだろうか」と不安になったり悩んだりすることも多く、自分の未熟さを感じる毎日でした。

そのような中で、職場の同僚や先輩等、周りの先生方には本当に多くの場面で支えていただきました。困ったときにはすぐに声をかけてくださり、具体的な指導方法を丁寧に教えてくださったり、時には温かい言葉で励ましてくださったりと、常に寄り添ってくださいました。教師として何もかも

が初めての経験で不安を抱えていた私にとって、職場の先生方の存在はとて大きく、一人では乗り越えられなかったであろう場面も、周りの先生方のおかげで前に進むことができました。多くの方に頼らせていただいた一年は、私にとってかけがえのない多くの学びにあふれ、教師としての基盤を築く大切な時間となりました。

また、受け持たせていただいた小学校三年生の子どもの存在も、私にとってかけがえのない支えでした。毎日元気いっぱいに登校し、何事にもまっすぐでひたむきに取り組む姿はとても印象的でした。時には思うようにいかず落ち込むこともありましたが、子どもたちの「先生、できたよ」という嬉しそうな声や、友達と助け合いながら一生懸命頑張る姿に触れるたびに、心が温かくなり、「私も頑張ろう」と前を向く力をもたっていました。その無邪気で一生懸命な姿は、私自身の教師としての在り方を見つめ直すきっかけとなり、多くの気付きを与えてく

れました。小学校を離れた今でも子どもたちのまっすぐで素直な姿がずっと心に残っています。「みんな頑張っているかな。」と思いつきだけで、頑張る力が湧いてきます。こうして初任者として関わった子どもたちや、支えてくださった先生方との出会い、そして日々の中で得た数々の学びは、これから先も決して忘れることのない大切な財産です。昨年度の一年間で感じたこと、悩んだこと、乗り越えてきた経験のすべてを、これからの自分の糧として、ずっと大切にしていきたいと思っています。

そして今年度、私は中学校へと異動しました。新しい環境の中で、部活動の指導や家庭科の授業、中学一年生の学級担任など、これまで経験したことのない役割に向き合っています。小学校とは違う子どもたちの姿や関わり方に戸惑うことも多く、改めて自分の力不足を感じる毎日です。

特に、小学校との大きな違いとして感じているのは、一つの学級にずっと関わるのではなく、全年の家庭科の授業を担当していることです。毎時間さまざまな学年の子どもたちと関わる中で、それぞれの発達段階に合わせた声のかけ方や授業づくりの難しさを感じています。その分、「授業を大切にしたい」という思いが以前より強くなりました。子どもたちが少しでも「楽しく学べた」「よく分かった」と感じられる時間になるよう、教材研究をしたり、授業の進め方を考えたりしながら、毎日試行錯誤しながら授業づくりに取り組んでいます。

また、自分の学級の子どもたちと関わる時間が、小学校の頃に比べて少ないことにも難しさを感じています。週に数回しか学級で授業をする時間がない中で、一人ひとりの様子を丁寧に見取ったり、信頼関係を築いたりすることの難しさを実感しています。「もつと話を聞きたい」「もつと子どもたちのことを知りたい」と思う一方で、限られた時間の中でどのように関わっていけばよいのか悩むこともあります。



子どもの笑顔を

原動力に

伊方町
伊方小教諭
比企愛里紗
(令五卒)

大学を卒業し、教員としての第一歩を踏み出してから、あつという間に月日が経ち、気付けば四年目に突入しました。教壇に立ち始めた当初は、一日一日が長いようにも感じていましたが、今こうして振り返ってみると「もう三年も経ったのか」と、時間の流れる早さに驚いています。

思い返せば、初任の頃は日々の校務分掌や授業準備、学級経営など、目の前の業務をこなすのに一杯でした。しかし、経験を重ねた今では、周囲の状況に目を配り、子どもたちの心の機微を察する心の余裕が少しずつ生まれ始めています。まだまだ未熟な部分ばかりですが、一歩一歩、確実なステップアップを試みている最中です。

現在は、愛媛県の西端に位置する伊方町の小学校で、子どもたちと賑やかで楽しい毎日を過ごしています。伊方町は、美しい海と豊かな緑、そして斜面に広がるみか

ん畑など、豊かな自然に囲まれた街です。そして何より、地域の人たちがとても温かく、学校の行事や日々の活動をいつも我がことのように見守り、支えてくださっています。現在私が担任しているクラスの児童数は、十人ちよつとです。この少人数という環境は、子どもたち一人一人の表情や小さな変化に気付き、それぞれに合った歩幅でしっかりと言葉を交わし、深く関わる事ができるという大きな魅力があります。元気一杯、笑顔一杯で登校してくる子どもたちと、毎日同じ教室で同じ時間を共有できること自体が、今の私にとって最高の幸せです。

もちろん、教師という仕事は決して楽しいことばかりではありません。自分の指導力不足に悩み、正直に言って「大変だ」「苦しい」と思う瞬間もあります。それでも、私はこの仕事が好きです。教員としての強いやりがいを感じると思う瞬間は、主に二つあります。一つ目は、子どもの劇的な成長の瞬間を特等席で見られたときです。去年受け持ったクラスに、鉄棒の逆上がりがなかなかできない児童がいました。体育の授業で鉄棒の時間が来るたびに、その子は諦めず何度も何度もチャレンジを繰り返していました。しか



し、どうしても足が上まで上がらず、あと一息のところまで回ることができませんでしたが。休み時間にも練習を重ねましたが、結局、一度も成功させることができないまま、無情にも鉄棒のテスト当日を迎えてしまいました。見守る私も「今日は正直難しいかもしれないな」と内心不安に思っていた次の瞬間、今まで一度も回ったことのない逆上がりを見事に成功させました。そのときの弾けるようにうれしそうな笑顔は、今でも鮮明に脳裏に焼き付いていて忘れることができません。さらに感動したことは、その子は一発の奇跡で終わらせず、その後も何度も連続で成功させてみせたのです。これまでの地道な努力が最高の形で実ったのだと思うと、自分のこと以上に胸が熱くなり、私まで涙が出そうになるほどうれしかったです。「諦めなければ夢は叶う」と

いう言葉がありますが、それはまさにこの瞬間のことだと確信しました。このように、失敗を何度も積み重ねたのちにある最高の成功体験を、子どもと真正面から一緒に味わい、分かち合えることは、この職業ならではの特権だと思います。

二つ目は、努力が報われるときです。子どもたちの成長のために、日々教材研究や生徒指導に努めています。でも、何もかも上手くいくわけではなく、失敗してしまうこともたくさんあります。その度に、子どもたちに申し訳ない気持ちと自己嫌悪で一杯になります。

でも、子どもたちは、大人が思っている以上に教員の普段の関わりや姿勢をよく見てくれます。生活科の感謝を伝える活動のときのことです。家族や地域の人など、これまでお世話になった人に感謝の気持ちを手紙にして届けようと投げかけると、ありがたいことに、子どもたちの中から「先生に感謝を伝えたい!」という声がたくさん上がりました。書き終わったみんなの手紙を読むと、そこには温かい言葉があふれていました。「いつも楽しい授業をしてくれてありがとうございます」「昼休みに一緒に遊んだのが楽しかったです」「来年も先生に担任になつてほし



いです」など、私の予想を遥かに超えるうれしい言葉がたくさん書かれていました。上手く授業ができなかったり、注意してばかりの毎日になってしまったりして、反省の絶えない日々だったのに、子どもたちはこんなにも真つ直ぐ私を慕ってくれていたのだなと思うと、思わず胸がいっぱいになりました。そして、「この子たちのために一生懸命頑張つてきて本当によかった」と、心から救われるような気持ちになりました。

これから先、何年、何十年と経験を重ねても、きつと上手くいかない壁にぶつかることもあるだろうし、大変な思いをすることもあろうと思います。でも、あの鉄棒を諦めずに回り切った子どものように、私自身も失敗を恐れずに新しいことにチャレンジし続けたいです。

見えにくい変化を 信じて



宇和島市
城南中教諭
相原 遥
(令三卒)

教員としての生活も五年目を迎えました。振り返ると、あつという間でありながら、目の前の一日一日に向き合い続けてきた濃い時間でもあったように感じます。学生時代に思い描いていた「理想の教師像」に近づけているのかと問われると、正直なところ自信を持って頷くことはできません。しかし、だからこそ生徒たちとともに悩み、考えながら歩んでいる今の在り方に、教師として生きる意味があるのではないかと感じています。

日々の学校生活は、決して思い通りにはいきません。丁寧に準備をしても生徒たちの反応によって授業の展開は大きく変わります。「伝わった」と感じられる瞬間がある一方で、「なぜ届かなかったのだろう」と立ち止まることも少なくありません。また、学級経営

や保護者対応、部活動指導など、課題は尽きず、余裕を持ってないまま一日が終わることも多くあります。

そんな中でも、私が大切にしたいと考えているのは、「生徒一人ひとりを考えること」です。当たり前のようでいて、忙しさの中では見失いがちな視点でもあります。目に見える言動だけでなく、その背景にある思いや葛藤に目を向けること。そして、その生徒なりのペースでの変化や成長を認めること。それが、教室の安心感やあたかかさにつながっていくのではないかと感じています。

印象に残っているのは、不登校傾向にあったある生徒との関わりです。努力家で自分を追い詰めてしまう面のあるその生徒は、ある時を境に教室に足が向かなくなり、欠席が続くようになりました。担任としてどう関わるかがその生徒にとって最善なのか。答えは見えず、試行錯誤の日々が続きました。保護者の方の不安も受け止めながら支援の在り方を模索する中で、状況は一進一退を繰り返しました。家の外に出られた日もあれば、翌日にはまた部屋にこもっ

てしまう。誰とも関わらず距離が開いてしまうこともあり、関わり

の難しさを痛感しました。正直なところ、「これで良いのだろうか」と自問自答する日々でした。声を

掛けることが負担になっていないか、関わろうとすること自体がプレッシャーになっていないか。良かれと思って選んだ言葉や行動が、生徒を追い詰めてしまうのではないかと不安になることもあり。そのような中で私が続けていたのは、その生徒に宛てた手紙を書くことでした。返事を求めるのではなく、何気ない日常やその子の好きなことに関する小さな発見、ときにはクラスの様子などを綴り、配布プリントとともに届け続けました。「今日はこんなことがあったよ」「クラスでこんな話題が出たよ」といった取り留めのない内容ばかりでしたが、教室とのつながりを、細くても保ち続けたいという思いからでした。それでも、その行為に意味があるのか確信は持てませんでした。むしろ、迷惑になっているのではないかと感じることも多かったように思います。それでも、「これをやめてしまったら、本当に適切

れてしまうのではないか」という思いから、関わり続けることを選びました。

すぐに大きな変化が見られたわけでは

ありません。しかしあるとき、保護者の方を通じて「本人が時々手紙を読んで嬉しそうにしています」という言葉をいただきました。その一言に、これまでの迷いや葛藤が少し報われたように感じました。同時に、目に見える成果だけでなく、「関わり続けている」という過程そのものに意味があるのではないかと考えるようになりました。

や周りの先生方、保護者の方々と関わりの中で、少しずつ自分なりの教師像が形づくられてきているように感じます。

これから先も、迷いや不安が

なくなることはないと思います。それでも、何気ない日常の中で生まれる小さな変化や、言葉にならない思いを大切にしながら歩んでいきたいと考えています。あの日届け続けた手紙のように、すぐに形に残るものがあるとは信じて。

目に見える成果にとらわれるのではなく、その奥にある小さな変化を信じること。迷い、問い、そ

れでも関わり続けること。私の歩みもまた、生徒たちと同じように

一直線ではなく、迷いの連続です。それでも、一人ひとりの葛藤に寄

り添い、共に歩めるこの日々

に、私は誇りを感じています。不器用

でまっすぐではないこの歩みが、

いつか誰かの糧になると信じて。

明日もまた、教室へ向かいたいと思

います。



子どもたちとともに



松山市

愛大教育学部
附属幼稚園

松澤 絢子

(平二六卒)

大学時代には様々なことを学ばせていただいた附属幼稚園に、再び戻ってきて数年が経ちました。

附属幼稚園では、毎日元気な子どもたちの声が響き渡っています。

私が附属幼稚園に勤務することになってまず驚いたのは、園内のいたるところで夢中になって遊ぶ子どもたちの姿です。朝の支度を済ませるとすぐさま遊びが始まり、クラスや学年を超えて、様々な場所ですぐ自分のしたいことを一生懸命にしている姿に驚くとともに、「こんなにも夢中になって遊ぶんだな。」と感じたことを今でも覚えています。

「〇組さんのみーなーさーん!」と呼び掛けられると、「はあーい!」と答える子どもたち。何か楽しいことがあるとわかっているのかもしれません。「アイス屋さんがあります。来てください!」そんな呼び掛けがあると、すぐに



部屋を飛び出して、お店屋さんに向かいます。何度もお店に行つて、お店屋さんとのやり取りを楽しむ子もいれば、持ち帰ったアイスを使つておままごとをしたり、今度は自分がお店を開いたり、遊びは次々に広がっていきます。

また、年長児さんの企画する行事があることも印象的でした。毎月の誕生会、夜のつどいなど、多くの行事が年長さん主体で行われています。自分たちで考えたことが実現していく楽しさが更なるやる気に繋がるとともに、計画や準備も遊びの一つとして取り組むからこそ、行事を作り上げていけるのかなとも感じました。

自然いっぱい環境の中で季節を感じながら遊べることも、附属幼稚園ならではの魅力です。春に

はたくさんのお花が咲き誇る附属幼稚園ですが、毎年必ずといっていいほど現れる「ツマゲロヒヨモン」の幼虫がいます。子どもたちは花の咲くプランターをのぞき込み、一生懸命に「ツマゲロさん」を探します。見つけると、嬉しそうに自分の虫かごに入れてお世話を始めます。「いっぱいお花をいれなくちゃ!」「うんちをしたら



掃除もしないとね!」と、お世話の仕方年々上手になり、家に持ち帰ってはまた次の日幼稚園に持ってきて、熱心にお世話を続ける子どもたちが多くいます。だからこそ、さなぎからチョウになる瞬間を見ることがめずらしくありません。

夏が近付くと、プールではヤゴ捕りが始まります。時にはお隣の

附属小学校からお兄さんお姉さんたちがやってきて、一緒にヤゴを捕ることもあります。附属小学校にある池で、ザリガニ釣りをさせてもらったこともあります。また、園内にあるヤマモモの木からはたくさんのお実が落ちてきます。おままごとに使ったり、ヤマモモジュースを作ったりと、子どもたちの遊びを盛り上げてくれます。

秋になり、附属中学校の方に掛けみると、たくさんのおんぐりやプラタナスなどの綺麗な色の葉っぱに出会えます。イチヨウの葉っぱをたくさん集めてお風呂のようにして楽しんだり、ドングリを使って遊んだり、たくさんのお宝を夢中になって集めると、どんどん楽しい発想で遊びが展開されていきます。



冬には、大きなプールが凍って楽しい楽しい氷集めが始まります。大きな氷を手にした子どもたちのキラキラとした素敵な表情は、季節ならではの特別な光景です。

四季を感じながら遊び、多くの人々と関わりながら遊ぶ楽しさを知っている附属幼稚園の子どもたちから、私は日々多くのことを学ばせてもらっています。子どもたちは遊びの中で「こうしたい」という思いがあっても、なかなかうまくいかないことも多くあります。自分でしたいという思いに寄り添いながら、何をどこまで援助すればいいのかは本当に毎日試行錯誤の連続です。

一人一人違う子どもだからこそ、好きなことも得意なことも当然違ってきます。そのような中で、教師として関わる自分にできることは何かを探りつつも、なかなか答えは見つかりません。これから毎日の子どもたちとの時間を大切にしながら、子どもたちとおもいつき遊び、たくさんのお話を教えてもらいながら成長していけたらいいと思います。

教育学部トピックス

愛媛大学教育学部附属特別支援学校高等部の生徒たちが「財政教育プログラム」に参加しました

【二月五日(木)】

愛媛大学教育学部附属特別支援学校高等部の生徒たちが、二月五日(木)に「財政教育プログラム」に参加しました。これは、財務省が全国国立大学附属学校PTA連合会による「PTA未来への架け橋PJ(プロジェクト)」と連携し、生徒たちが税金や社会の仕組みについて学び、公共サービスがどのように支えられているのかを理解することを目的として実施されたものです。授業では、財務省四国財務局の担当者から税金の果たす役割や使い道等について説明を聞いたたり、実際に一億円のレプリカを触ってみました。生徒たちは、クイズや資料を通して、税金が私たちの生活にどのように関わっているのか、また学校や病院、

道路など、生活に必要な施設や公共サービスについてなど、普段はあまり意識することのない「財政」について身近な生活と結び付けて考える良い機会となりました。参加した生徒からは、「救急車が出動するのに税金が使われていることが分かりました。」「将来、仕事を始めたら給料がもらえますが、お金は大切なものなのでよく考えてから使おうと思います。」などの感想がありました。今回の学習を通して、社会の仕組みや公共サービスと税金の関わり等について、理解を深めることができました。

(https://www.ehime-u.ac.jp/fp_20260326_edu/ 参照 2026

年3月26日)



担当者からの説明を聞いている様子



1億円のレプリカを実際に手にしている様子



感想について取材を受けている様子

令和八年四月十六日に教育学部と附属学校園の先生方による愛媛大学教育学部合同研修会が開催されました。

令和八年四月十六日に教育学部と附属学校園の先生方による愛媛大学教育学部合同研修会が開催されました。全体会では、日野克博合同研修会会長の挨拶の後、今年度着任された新任教員の先生方の紹介、シンポジウムが行われました。シンポジウムでは、「教員就職率の向上と教育実習の充実に向けて」のテーマに基づいて話し合われました。まず、愛媛県教育委員会義務教育課教職員係管理主事・係長の岡田誠様より「愛媛県の教員需要 現状とこれから」について話題提供を頂き、地域の教員需要やニーズ、教員養成に期待されることなどについて学部教員と附属学校園の教員で最新情報を共有することができました。次に、昨年度発足したウエルビーイング研究会所属の大西義浩先生より「実習生と指導教員のウエルビーイングを高める教育実習とは？」という題名で研究報告がありまし

た。そして、パネルディスカッションでは、実習委員会委員長の立松大祐先生が進行役を務め、附属小学校の小迫朝子先生、附属中学校の福岡拓矢先生、教職総合センター長の白松賢先生が登壇されました。今年度はコース再編後の新しい実習が始まる年であり、附属学校園の教育実習の受け入れ方

が変わる中、教育実習を教員就職率の向上につなげていくためにはどのようにすればよいか活発な意見交換が行われました。シンポジウム後は、研究部の部会と情報交換会が実施されました。今後の共同研究に向けた取り組み等について情報交換が行われました。本研修の成果を踏まえて、学部・附属学校園の連携を通じた教育活動や共同研究をさらに推進していきたいと思っています。」

(<https://ed.ehime-u.ac.jp/edhp/information/5139/>)



合同研修会の様子

教育学部中庭に設置されている師道鑽仰之碑と石井素胸像

二つとも教育学部中庭に設置されており、日々学生たちを見守っております。是非、大学にお立ち寄りいただきご覧いただければと思います。



石井素胸像



師道鑽仰之碑

先輩を偲ぶ



あしあと (15)

先輩たちのあしあと



(教育学部同窓会百周年記念誌より原文のまま抜粋)

思い出

愛媛女子師範学校

池内イワノ氏寄稿

(大正一二卒)

私は大正一一年四月女子師範の裁講へ入学しました。当時は寄宿舎が狭いため二部の方と私たちは栄町の校外寄宿舎へ入舎しました。舎監は滝川先生で、厳格でしたが家族的な雰囲気であつた生活が今も忘れられない懐かしい思い出です。制服は元禄袖の着物に紺のサージの袴をつけて履物は下駄でした。途中から靴をはくようになりましたが、和洋折衷でいかにも変なかつこうですが、半世紀も前はこれがハイカラな服装で通用したものです。今後思い出綴るに当たって古いアルバムのパージをめくり、今は跡形もなく

なつた校舎や、豊田校長先生はじめ諸先生方のお姿、またお友だちの折々の写真を懐かしく飽きず眺めていますと、きのうの事のように思えてなりません。

とくに五〇余年過ぎても脳裏を離れませんのは、在学中の大正一一年一月二四日に今上陛下が皇太子殿下の御時に女子師範へも行啓遊ばされ、私たち全校生が黒の紋付の着物に袴で服装を正し、幾度も幾度もリハーサルをして奉迎の榮に浴したことです。講堂で薙刀を御覧いただき、合唱もお聞き下さいました。私も裁講の代表として薙刀の選手に選ばれて猛練習をして身体を損ね、途中でひいたことは今も残念でなりません。昨年は陛下の五〇年御在位と金婚式のお祝いがあり、国民こぞ御寿ぎ奉りましたが、お若くて威

厳と気品をお備えの皇太子殿下のころを、おしのびして感慨無量でございました。

私たちの卒業は大正一二年三月で、その年に関東大震災が起こりました。辞令をもらったのが今治で、越智郡宮浦小学校へ赴任と決まりました。父としよに大三島へ渡ったときは、何ともいえぬ淋しい思いでした。元氣のよい五年の男女組の受持ちで感傷的な気持ちも吹き飛び、日曜祭日もなく生徒としよに生活しました。ほんとうに楽しい一年でした。よく最初の生徒は忘れられんと聞きますが、総べての教え子は忘れることは出来ませんけど、とくに印象深く五〇数年後の今もはっきりと一人一人の顔が、言葉が、まぶたに、耳に蘇って参ります。

二年目は伊予郡の佐礼谷で、代教に行つた高二の学級に森岡正雄先生や、河内重雄先生等後に大校長先生になられた方が居られ、ときどきお目にかかる懐かしい話が出ます。

次は母校の北山崎へ転勤、大正一五年から昭和一四年の末までいたので、教え子も一番多く、婦人会や国防婦人会、また青年団とのつながりも深く、日支事変も起こり、平和な時代から緊縛の時代まで過ごしたので、各層の方との親交もあり、一生忘れ得ぬ時代です。昭和一五年一月から四年余、西

條実践高等女学校で大東亜戦争の激しいころを過ごしました。歩け歩けるころで、遠足も乗物はいっさい使わないで、新居浜・横峰寺・笹ヶ峰とよく歩きました。現在の西條北高のお堀の周囲を毎日駆け足したお蔭でしょうか、足だけは今も自信をもっています。昭和一九年四月から二一年三月末まで松山城北青年学校で過ごしました。大東亜戦争もいよいよ激しいときで、生徒と勤労奉仕や食糧増産に励みますし、避難舎を改造して自分たちの手で教室づくりをしました。現在は内宮中学校でりっぱに校舎が建っていますが、昔が懐かしいです。

昭和一〇年五月二八日から二週間、女教師だけを満鮮視察にやつてもらいました。各都市から一名あて選ばれ、幸いに私も参加でき、釜山・京城・平城・奉天・吉林・撫順・新京・旅順・大連と、学校や戦跡の視察、朝鮮や満州の見学もさせてもらい非常に勉強になりました。県人会の方や女子師範の卒業生が、どこへ行っても歓待して下さったことは忘れられません。

今は退職女教師の会や婦人関係の会で勉強させてもらっています。が、生涯教育の大切さを知り、忘却することの多くなつた年令ですが、生涯勉強を続けたいものと思願しています。

青春のころ

愛媛青年師範学校

酒井 寿賀氏寄稿

(昭和一八卒)

松田池方面から流れてくる、何とかいう川があるそのほとりに、ひなびた寮と平屋の校舎が同棲していた。そして道をはさんでや離れたところには大和寮があつた。もと旅館であつたとかで、ちよつとした庭もあり、当時としてはしゃれた寮であつた。この寮にはいつたときは何か心温まる家庭的なうれしい気がしなくてもなかつた。もちろん全寮制で、家族制度をとっていた。金村先生が自分たちの家長だつたときのことが、今も記憶に残っている。ところが昭和



和一九年二月八日太平洋戦争に突入、臨戦の波はここかしこ、国内いたるところにおし寄せ、小隊編成となる。

古ぼけたラジオの周囲にむらがつて耳を傾けたあの宣戦の詔勅。うすき悪く、しかも何かずつしりと重い物が我が身にのしかつたかのようなあの気持ちは、単に私だけでなく国民総べてではなかつたのだろうか。間もなく、いや、すでにそれ以前だったかな。兵役帰りである同期のS氏(当時

は年輩の者が多くいた）に赤紙、すなわち召集令状。急遽荷物をまとめ帰宅、彼は新婚で奥さんは実家にいた。土曜日ともなると、そそくさと帰宅していたものだった。気の毒だった。でもまだその当時は勝ち戦さ、真珠湾攻撃の大戦果に日本国中わきたっていた。

ところがすでに農家では収穫高に応じて米麦の提出、これは強制的に最低限自家消費分を残して集められる。消費者には配給米制度が行われはじめた。（これはそのまま戦後遅くまで続いた。）大和寮と川一つはさんだ向かいに鳥谷さんという餅屋さん老夫婦がいて、私たちには、つねに好意を示してくれていた。私たちもおばさん、おばさんと親しんでいた。一個三錢しばらくして五錢くらいになった。でもよく買って食った。

菓子屋の店頭から商品の姿がなくなったからだ。でもそれもつかの間、餅米が入らなくなった。そのころはもう学校の食堂も麦混じりの雑炊、しかも、盛り切り一ぱい、これで若者の腹の虫がおさまらうはずがない。寮の二階から鳥谷の店が手に取るように見える。「諸が出とるぞ。」だれかがさげふと、一せいに我先にと走った。一皿に三、四切れ、またたくまになくなっておしまい。朝の九時であろ

うが十時であろうが、授業中でも本を立てて、もぐもぐやった。多分先生も知っていて知らぬふりをしていてくれたにちがいない。中

には若い先生より年輩の連中もいたくらいだったし……。軍事教練もはげしくなった。佐治大佐の指揮で、桜三里を越え、西条まで一日行程、途中、野戦演習松高との対戦だった周桑平野を駆け巡る。三八式歩兵銃は重かった。足には、まめ、びっこをひいた桜三里の山路は、ときに馬車が通る程度で曲がりくねり、全く今昔の感。帰松もまた徒歩。しまいには軍歌を歌う気力もなかった。それにしても全職員参加だったから、年輩の先生方にはたいへんだったろうと、今にして思うのである。後に軍隊に入り、北満・北支と巡ったが、自動車隊であったためついぞあの時ほど徒歩行軍したことはなかった。

冬期耐寒マラソン城山一周、暗い冬の朝点呼に出て後こっそりまた寮にもどった我面々、寢床にもぐりタバコプカプカ大言壮語、何かの気配に後の入り口のフスマがいつの間にか開いていて、その間に大がらの田村教官（京大出、予備役中尉後戦死されたと聞く）のメガネがキラリ、スレンダー……。しばらく沈黙の後「もう後しばらくじゃのう。」と言ったきり何も言わず帰られ、ホットして胸をなで顔を見合わせたものの、バツの悪かったこと。

五明、それとも伊台と言ったかな。耕心農場つてのがあった。弁当持ちでよく行ったものだった。上下級生の差別はきびしかった。

寢床の上げおろし食事準備等みな下級生がやった。朝礼、夕礼があり、祝詞・般若心経をよく唱えたものだ、松田池の東方山手にある何とかいう禅寺での座禅、蚊に食われ足がしびれる、もぞもぞ、中には、うつらうつら、見のがしなく、ピシッとくる策杖とやらにギリ。

高浜小学校の作法室を借りての合宿海浜訓練、最終日の特別献立によるブリかハマチの刺身はうまかった。軍歌で、詩吟、そうそう軍神若佐中佐を歌ったことを記憶している。午後一せいに夏休み入り、我が家へ……。ところが、夏の生魚のたたりてきめん、多数の食中毒、自らも家路の途中、人気のない山道の夕暮れ路傍に倒れ、一時失神、夜の冷気にふと気もどおり、あえぎあえぎ、地をほう姿で我が家に。家族の驚き、苦しかった。

かくして一八年三月卒業、四月赴任、翌一九一九年二月入隊、そして終戦。青春なき時代の我が青春はかくして淡く終わったのである。

雑感

愛媛大学教育学部
堀内千津子氏寄稿
(昭和二八年)

三月の終わりの日に同期会をするようになって、今年で八回目である。その数時間だけは日ごろ厳格勤勉な先生も、みんな昔の

学生時代に返ってワイワイとやるのだから不思議である。別々の人生を過ごした時間に比べると、ほんのわずかの時間、共に学び共に遊んだだけであるのに、会合の瞬間から、何のともないもなく若い学生のころの——大きな可能性を信じ口角あわを飛ばして議論した昔の気持ちにかえられるし、またそのために愛媛県の高知から、中には県外からさえ集まって来る仲間たちなのである。とは言っても二〇余年、気持ちは年月の空白を飛びこえて行けても、年輪はだれの上にも、平等にかぶさっているのを痛感せざるを得ない。若いころの面影を残しているとはいえ、人間の叡知と深い経験をつんだ魅力的な、完成された中年、と言えは聞こえはよいが人生の半ば過ぎ、あまり大きな変化も波瀾もなく終着駅までの見通しも、およそ見当のつく年ごろの我々である。確かに、二十余年は長かった。私たちの上に、青春と中年を置かえたのと同じくらい大きな変化を学校の上にもたらしていた。

その昔、若々しい学究ぶりに私たちがあこがれた、かつての恩師の退官記念会に出席した時、まるで、次元の違う世界に飛びこんだような気持ちだった。懐かしい木造校舎はスマートな鉄筋に姿をかえ、広々としたクローバーの庭——昼食時に、休み時間に、時には授業をエスケープして、先輩の人生

論に耳をかたむけ、友の失恋を打ちあけられた思い出深い草っ原の校庭も、今は車の行きかう舗装路となり、若さだけがあのころの私たちと共通で、比べものにならないくらい、はなやかな学生たちの姿があった。一番りっぱだった正門脇の記念講堂はまるであばら家になって、昔の面影をとどめるのは城山の眺めくらいである。考えて見れば私の子供が、あのころの私に近づき、かつての私にとってはずかの教え子が社会の中堅になって活躍するのを聞く、このごろであるから、当たり前のことに違いない。

時代は全く移り変わるのである。そのうちに、私は、あのころの私の親がそうであったように、まじめに勉強するように、若さを、学生時代を大切にするように、折りにふれては子供たちに、くどくどと言いつづけるだろう。

そして、教員生活を少しの期間経験しただけで、家庭人となってしまった私にとっては、昔の仲間に出会う唯一の機会である同期会に、せつせと毎年出席しつづけるに違いない。学校の傍を通るたびに、学校も変わったなと、くり返し思いながら。



会員の声



大拙・英訳「教行信証」の研究(四)



吉原 宏文
(昭四二卒)

① はじめに……

私は間もなく八十四歳の超高齢者となる。教育者である両親の慈愛のもとで、大切に育てられたことを深謝しながらも、不幸にして、生涯、独身の悲哀を余儀なくされてきた。此処にきて、やはり一抹の寂しさは避けられない。何故か？折角の、安定した保証された教職を捨て、鬱勃たる仏道の世界に転換したからであろう。広島市内の小学校の校長先生から、京都の浄土宗（法然上人を仰ぐ、本山・知恩院）の宗門大学である

佛敎大学大学院に進学したとき、

「学校教育よりも深い宗教の世界に入られたのだから頑張ってください」との激励の手紙を受け取った。併し、若年からして学問一筋の軌道ではなく、紆余曲折の道を彷徨い、特に、語学力が絶対的必要条件である仏敎哲学の学習は厳しいものであった。

扱、現今、急速に進展する科学技術は、宇宙や生命そのものに焦点を合わせ、一方、人間が創り出したものであるにも拘わらず、その手を振りほどき独歩し始

めた悪魔の核兵器は、近い将来、人類そのものを抹殺するかもしれないという危機的状況に對峙している。仏敎では、五濁悪世界①という。即ち、末世において現れる避け難い五種の汚れのことである。併し、我々は絶望し嘆くしかないのだろうか？…此のとき、

我が先達・親鸞聖人は、その著『正信偈』において、「如来所以興出世・唯説弥陀本願海」と、静謐な真理を表現をされている。然り。希望の光である。即ち、仏敎の開祖・釈迦如来がこの娑婆世界に興出せられたのは、唯一つ、三千大千世界の本師本仏である阿彌陀如来の、「業縁深いこの私を絶対に救い取るぞ」という誓願の建立を証すためであった。溺れて藻屑と消えてしまうほかない私が承諾し、信じ樂うその一念に、如来の腕に抱きあげられ、本願の海に浮かぶ大船に乗せられる。そして、暗黒のこの世界から明るく幸せな無量光明土に招待され、

再び退転することのない正定聚（仲間）に加えられることが約束されている②。

私は、幸運にも、京都大学の仏敎学の碩学・荒牧俊俊先生から薦められ、英語の勉強も兼ね、鈴木大拙博士の英訳「教行信証」を読み始めた。同時に、愛媛大学教育学部の同窓会報で鍛えられ、御蔭で本典（教行信証）を少しずつ深く理解できるようになった。余生の終わりまで、挑戦し続けるであろう。

* * *

② 前会報（二四一号）からの続き……

『大阿彌陀經』（『大無量壽經』の別訳）に言う。私が仏覺に達したら、八方・上下・無央数（その数が予測もつかない）の全ての仏国中に私の名前が響きわたり、比丘僧と大衆に向け、功德に満ちた我が国土の善について語りかけるであろう。同時に、諸天や人間

のみならず、蜎飛・蠕動の類（空に飛びまわる虫や、地に蠢く小虫）に至るまで、私の名前を聞き、慈心を興して歡喜踊躍し、皆、わが国土に招待されるであろう。若し、この願が成就しなければ、わが仏覺を捨てましょう。

『無量清淨平等覺經』に言う。若し、私が仏の覺りに達したら、他方の仏国の人民が前世に悪をなせる縁によってわが名字を聞き、道を求めてわが国に生まれたいと欲うであろう。壽命終えて、皆一様に三惡道（地獄・餓鬼・畜生）に退転することがないように。彼らは、その強い願望によって、必ずわが国土に來生するであろう。若し、実現しなければ、仏の命を捨てます、と。阿闍世王太子と五百の長者子は、無量壽仏の本願（二十四願）を聞き、皆、大に歡喜し、我らもまた仏と作るときには無量壽仏のようでありたいと、心の中で願った。仏陀は、その心を知られて、弟子達

に告げられた。「この阿闍世王太子と五百（たくさん）の意か？」の長者子とは、今後いつかは、皆、無量寿仏のような仏と作るであろう。この人々は求道を始めてから、長い間、皆各々四百億の仏を供養してきた。この人々は、前世、迦葉仏のときには、わが弟子であつた。今また此処に値遇することになったのである」と。弟子達は仏の説を聞き、皆、胸を踊らせて歓喜しないものはなかった。即ち、諸々の比丘僧（求道者）も同じであつた。かくの如きの人は仏の名を聞き快く（愉快に感じ）安穩（何事もなく穏やか）にして大利（大きな幸せ）を得るであろう。我等の類（仲間）は、この功德によつて、諸々の好きな刹（国土）を獲得するであろう。かくして、無量覚（阿弥陀仏）はその決（未来に必ず仏となることを予言すること）を授けるであろう。「我、前世に本願あり」。一切衆生、法を聞いて皆、悉く我が国土に生れ

るであろう。私が念願したものを全て具足するであろう。諸々の国より生まれ来たつたもの、皆、悉くわたくしの間（浄土）に到つて、この生涯で不退転の身となるであろう。速やかに疾く（早く）超えて安樂国の世界到らねばならぬ。しかれば、無量光明土に至りて、無数の仏を供養するであろう。この功德のない人は、この経の名前を聞くことすらできない。唯、清浄の戒を有てるものだけが、この世界に還つて正法を聞くことができる。悪と僞慢（おごりたかぶること）と蔽（教えの聞き方が悪いこと）と懈怠（なまけること）の者は、この法を信ずることが困難であろう。宿世のとき、仏を拝見した者のみが楽んで世尊の教えを聴聞（ゆるされてきく・信じてきく）することが可能なのである。人間の命を得ることは大変難しい。また、仏が世におられてもお会いすることは大変難しい。信心の智慧ありて到るべからず。信心の智

慧に到ることも難しい。若し聞見せば精進して求めなさい。（このみすすむるなり）。この法を聞いて忘れず、即ち、見て敬い得て大さに慶こばば私の善き親原（親しい友人）である。この故に、道意（菩提）を發しなさい。たとえ、世界に火が満ちていても、このなかを突破して法を聞くことができれば、必ずまさしく世尊となつて、一切の生・老・病・死の輪廻の苦悩から済度されるであろう。

註①

- (一) 劫濁（時代の汚れ。飢饉や疫病・戦争などの社会悪また自然災害が増大すること。）
- (二) 見濁（思想の乱れ。邪悪な思想、見解がはびこること。）
- (三) 煩惱濁（貧・瞋・痴の煩惱が盛んになること。）
- (四) 衆生濁（衆生の資質が低下し、十悪をほしいままにすること。）
- (五) 命濁（衆生の寿命が次第に

短くなること。）

註② しかれば大悲の願船に乗じて

光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ずすなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵ふなり、知るべしと。

※（浄土に往生したものが再びこの世に還り、普く衆生を済度するという大慈大悲の徳）

二〇二六年（令和八年）三月十一日（水）

東日本大震災から十五年

※ 今回の会報をもつて、投稿を終了させてもらいます。有難うございました。同窓会が盛大でありますように。また、教育学部の大学院にも是非、博士課程が併設されることを願っています。

731-0135 広島市安佐南区長束一丁目十八ー五（一五）

表紙の作品について



勝間田 亜海
(令七卒)

『キラキラ帰り道』

本作品は、卒業制作『記憶の陽だまり』で展示した絵画作品十点の中の一つです。夕暮れ時の海をバックに、自転車に乗った二人が家に帰っている様子を描きました。ここに描かれている二人は互いに惹かれ合う男女をイメージしており、好きな人と一緒に帰ることのできる嬉しさやキラキラとした恋心を、水面に夕日が反射してキラキラしている様子と重ねて表現しました。私は恋愛のキラキラした気持ちを思い浮かべ制作しましたが、是非皆さまそれぞれの思い浮かぶ気持ちや情景と重ねながら鑑賞していただけると幸いです。

令和8年度 支 部 長 会 報 告

- 1 日 時 令和8年6月6日(土)
- 2 場 所 校友会館2F サロン
- 3 日 程 (1) 開会のことば
(2) 会長挨拶……高橋治郎会長
(3) 教育学部長挨拶・講話……日野克博教育学部長
(4) 各支部長及び理事自己紹介
(5) 議 事



- 議長選出 北条支部：川西潤校長
- 1号議案 令和7年度事業報告
- 2号議案 令和7年度決算報告
- 監査報告 監事：宮脇克彦校長
- 3号議案 令和8年度本部役員改選案について
- 4号議案 令和8年度事業計画案について
- 5号議案 令和8年度予算案について
- 6号議案 令和8年度支部助成金案について
- 7号議案 令和8年度支部活動支援費について
- 8号議案 支部現状報告及び事務局からの提案事項
- ・各支部におけるOB会員の把握状況及び会報配布方法について
 - ・会報発行回数について
 - ・発行方法について
- 9号議案 支部OB会員の事務局一元管理について
- 10号議案 第20回愛媛大学教育学部同窓会懇親会について
- 会報143号創基150周年記念号について
- 11号議案 会報原稿担当支部予定案について
- 教育学部サポーター制度特別講演会講師候補者について
- 議長退出 支部長・本部役員メールアドレス収集について
- (6) 連絡事項 第17回ホームカミングデーについて
- (7) 閉会挨拶…退任役員代表：奥定一孝前顧問
- 新役員代表 ：井上洋一新会長
- 配付資料1 愛媛大学教育学部同窓会会則
- 資料2 会報原稿担当予定（一部修正案）
- 資料3 令和8年度愛媛大学教育学部同窓会役員一覧表

4 概 要

今年度の支部長会は支部長20名（支部長代理2名含）と本部役員19名の計39名の参加のもと事務局からの提案議題（1号議案～11号議案）について協議を行い、全ての議案について承認を得ることができた。

挨拶・講話・協議概要については、以下に簡単に示す。

- 高橋会長挨拶：現在諸事情により同窓会が崩壊の危機にある現状や現在の課題として同窓会会員の把握の困難さ、各支部での教育学部同窓生不在の実情、会報配布の問題、支部運営の困難さ等について触れられた。さらに、教育学部前身校設立から150年という節目にあたり、同窓会の在り方を根本的に見直す必要性のあることを提案された。
- 日野学部長講話：教育学部の現状と取り組みについて詳細な報告をいただいた。大学を取り巻く厳しい状況として、国立大学の予算削減・教員人事の絞り込み、2035年の入学生激減予測・2040年代の3割定員減予測などをあげられた。一方で、地域教員希望枠の新設・教員養成特別選考の復活・才能教育センター・インクルーシブ教育センター・科学教育センターの3センター体制による機能強化の取り組みも紹介された。
- 各支部長及び理事自己紹介の後、議長に北条支部長 松山市立栗井小学校 川西潤校長を選任し、以後議案にしたがって協議を進めた。

※8号議案と10号議案については、関連性があるため順序を入れ替え、一括で審議を行った。

1号議案・2号議案・監査報告については一括で審議し、全員の承認を得る。

※監査報告については、監事の松山市立石井小学校 宮脇克彦校長が報告を行った。

3号議案・4号議案・5号議案については一括で審議し、全員の承認を得る。

6号議案について審議し、全員の承認を得る。

7号議案・9号議案については審議事項ではないため事務局長より説明を行い、周知を図った。

8号議案については、各支部からの現状報告の後協議を行い、今後の方針として会報の発行回数及び配布方法等時間をかけて検討し、改めて次年度支部長会で事務局より提案することで承認を得た。

10号議案については、承認を得たが、令和5年度に承認を得ていた職場だより会報原稿担当支部予定については、143号担当支部についてOBへの原稿依頼に変更を提案し、概ね了解を得た。

その他：11月開催予定の校友会主催第17回ホームカミングデーの日時と簡単な概要の説明を行った。また、ホームカミングデーに先立ち実施予定の「同窓会を語る会」についても期日と申し込み方法の説明を行った。

- 閉会挨拶：旧役員を代表して奥定一孝前顧問及び新役員を代表して井上洋一会長にお言葉をいただいて、閉会となった。



令和8年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本 部	顧 問	日 野 克 博・高 橋 治 郎			監 事	宮 脇 克 彦		事務局	阿 部 修 一	
	会 長	井 上 洋 一				中 矢 達 雄			矢 野 裕 司	
	副 会 長	村 上 朋 子			阿 部 晋			河 淵 陽 子		
		矢 野 裕 司								
	理 事	青 野 多喜夫	和 田 和 子		後 藤 陽 三		相 原 郁 子		山 本 千鶴子	
辻 井 芽美子		齊 藤 照 夫		白 石 久美子		渡 邊 恵 理		竹 上 正 也		
金 築 治 美		久保田 貴 章		桐 山 真 美		石 川 圭		越 智 政 英		
川 本 孝		井 原 賢 一		豊 田 高 広		村 上 美 樹		田 鍋 尚 佳		
清 水 彩 華										

県内支部	支 部 名	支 部 長		副 支 部 長			
	川之江・新宮	石 川 佳代子	金生第一小	鈴 木 幸 紀	妻 鳥 小	一 柳 直 宏	妻 鳥 小
	伊予三島	加 地 孝 昌	松 柏 小	矢 野 博 幸	三 島 小	仙 波 邦 孝	松 柏 小
	土 居	土 井 祥二郎	関 川 小	生 田 真 希	長 津 小	森 実 育 美	長 津 小
	新 居 浜	小 野 英 雄	神 郷 小	鴨 田 礼 子	船 木 小	佃 謙 吾	角 野 小
	西 条	莖 田 篤 史	玉 津 小	杉 山 安 隆	氷 見 小	山 内 雅 博	神 戸 小
	東予・周桑	杉 野 学	周 布 小	山 田 裕 之	壬生川小	武 藤 真由美	田 野 小
	今 治	川 崎 文 一	清 水 小	一文字 利 朗	波止浜小	森 泰 祐	南 中
	今治・越智	菅 洋 二	朝 倉 小	井 原 光 明	大三島小	白 石 建 彦	弓 削 中
	北 条	川 西 潤	栗 井 小	河 野 和 正	立 岩 小	高 市 秀 昭	河 野 小
	松 山	中 矢 達 雄	味生第二小	窪 田 良 知	素 鷲 小	村 上 正	中 島 中
	東 温	二 神 博	川 上 小	渡 部 和 寛	川 内 中	鶴久森 まゆみ	東 谷 小
	伊 予	高 石 達 也	北山崎小	小 林 智 洋	佐礼谷小	松 山 香 織	翠 小
	上 浮 穴	田 中 明 定	明 神 小	稲 垣 文	久 万 小	川 本 賢 一	柳 谷 小
	大 洲	飯 野 剛 宏	肱 川 小	岩 本 康 孝	平 小	伊賀上 純	三 善 小
	喜 多	石 崎 耕一郎	大 瀬 中	大 盛 通	小 田 中	城 戸 玲 順	五十崎中
	八 幡 浜	河 野 靖	八幡浜中	佐々木 治 彦	川之石小	上 岡 浩 人	八幡浜中
	西 宇 和	井 上 太	三 崎 小	大 石 友 紀	三 机 小	黒 田 立 史	大 久 小
	西 予	松 本 啓 進	三 瓶 小	松 本 勇 人	城 川 小	上 田 徳 彦	石 城 小
	宇 和 島	越 智 夫実由	清 満 小	薬師寺 由 佳	下 灘 小	竹 田 雅 彦	和 霊 小
	北 宇 和	松 本 智 昭	泉 小	水 野 由 美	松野西小	上 甲 和 典	好 藤 小
	南 宇 和	清 水 美 和	一本松小	銚 岩 俊 二	一本松中	好 岡 裕 子	柏 小
	附 属	川 本 孝	附属特支				

県外支部	東	京	令和5年度から連絡不能		
	京	都	河 野 直 樹		
	大	阪	令和4年度3月解散		
	神	戸	平 山 昇		
	岡	山	神 崎 順 治	小 出 悦 子	

編集委員	井 上 洋 一		村 上 朋 子		阿 部 晋	
	矢 野 裕 司		阿 部 修 一			

令和7年度 事業報告

4. 8(火)	令和7年度入学式	学部生(169名)・編入生(2名)・ 院生(68名) 計239名
4. 18(金)	第1回常任理事会	第1回理事会提出議題審議
5. 10(土)	第1回理事会	令和7年度本部役員案審議 令和6年度事業及び決算報告 令和7年度事業計画案及び予算案審議
6. 7(土)	支部長会	令和7年度本部役員案審議 令和6年度事業及び決算報告 令和7年度事業計画案及び予算案審議 令和7年度支部助成金案等確認
6. 13(金)	第1回編集委員会	会報140号最終確認・校正
7. 1(火) 7. 2(水)	同窓会報140号発行	会報発送作業(7,500部)
7. 4(金)	第2回編集委員会	会報141号のレイアウト確認
7. 18(金)	第2回常任理事会	第2回理事会提出議題審議
7. 26(土)	第2回理事会	前期事業報告及び第20回懇親会関係
10. 1(水)	臨時常任理事会	150周年記念誌関係に関する審議
10. 31(金)	支部活動支援金申込締め切り	2支部(附属、西宇和、八幡浜合同)申請
11. 8(土)	第16回愛媛大学ホームカミングデー 同窓会を語る会	教育学部同窓会参加 同窓会事業の今後について 10名参加
11. 20(木)	学部サポーター制度講演会	菅田前副会長による「教育学部中庭物語」
12. 12(金)	第3回常任理事会	第3回理事会提出議題審議
1. 14(水)	第3回編集委員会	会報141号最終確認・校正
1. 19(月)	第1回記念誌編集委員会	記念誌に関する話し合い
2. 9(月) 2. 10(火)	同窓会報141号発行	会報発送作業(7,500部) ※1週 間遅れ
2. 27(金)	第2回記念誌編集委員会	記念誌の概要について
3. 6(金)	第4回常任理事会	令和7年度事業反省、次年度重点 活動目標設定について
3. 14(土)	第3回理事会	年間事業の反省 新年度事業計画案について
3. 20(金)	令和7年度会計監査	監事2名による監査
3. 24(火)	令和7年度卒業式	学部生・院生・編入生 226名

令和8年度 事業計画

4. 6(月)	令和8年度入学式	学部生・院生・編入生 計245名
4. 8(水)	第3回記念誌編集委員会	記念誌レイアウト・寄稿依頼者等協議
4. 17(金)	第1回常任理事会	第1回理事会提出議題審議
5. 9(土)	第1回理事会	令和8年度本部役員案審議 令和7年度事業及び決算報告 令和8年度事業計画案及び予算案審議
5. 20(水)	第4回記念誌編集委員会	記念誌レイアウト・寄稿依頼者等協議
6. 6(土)	支部長会	令和8年度本部役員案審議 令和7年度事業及び決算報告 令和8年度事業計画案及び予算案審議 令和8年度支部助成金案等確認
6. 12(金)	第1回編集委員会	会報142号最終確認・校正
7. 1(水) 7. 2(木)	同窓会報142号発行	会報発送作業(7,500部)
7. 3(金)	第2回編集委員会	会報143号のレイアウト確認
7. 17(金)	第2回常任理事会	第2回理事会提出議題審議
7. 25(土)	第2回理事会	第20回愛媛大学教育学部同窓会懇 親会最終審議等
8. 22(土)	教員養成機関創基150周年記念	第20回愛媛大学教育学部同窓会懇親会
10. 9(金)	第5回記念誌編集委員会	記念誌編集作業
10. 30(金)	支部活動支援金申込締め切り	各支部において教育学部名で後援・ 賛助できるもの
11. 14(土)	第16回愛媛大学ホームカミングデー 同窓会を語る会	教育学部同窓会参加 同窓会事業の今後について
11. (未)	学部サポーター制による講義	教育学部卒業生による講演
11. 27(金)	第6回記念誌編集委員会	記念誌編集作業
12. 11(金)	第3回常任理事会	第3回理事会提出議題審議
1. 13(水)	第3回編集委員会	150周年記念誌(会報143号)最終編集・校正
2. 1(月) 2. 2(火)	150周年記念同窓会報143号発行	会報発送作業(7,500部)
3. 5(金)	第4回常任理事会	令和8年度事業反省、次年度重点 活動目標設定について
3. 13(土)	第3回理事会	年間事業の反省 新年度事業計画 案について
3. (未)	令和8年度会計監査	監事2名による監査
3. 24(水)	令和8年度卒業式	学部生・院生・編入生 未定

令和7年度決算書

単位:円

(収入の部)				
費 目	本年度予算	本年度収入	増 減	摘 要
1. 会 費	4,100,000	4,000,000	△ 100,000	入会者(200名)@20000
2. 寄 付	150,000	15,000	△ 135,000	寄付金・送料等
3. 雑 収 入	600,000	620,193	20,193	利息・大学総務補助・解約金等
4. 繰 越 金	1,712,017	1,712,017	0	
計	6,562,017	6,347,210	△ 214,807	
(支出の部)				
費 目	本年度予算	本年度支出	増 減	摘 要
1. 会 議 費	150,000	116,975	33,025	支部長会・理事会等
2. 旅 費	450,000	378,500	71,500	支部長会・理事会等
3. 印 刷 費	1,400,000	1,437,150	△ 37,150	会報年2回等
4. 通 信 費	450,000	294,699	155,301	会報発送・連絡費
5. 給 与 費	1,600,000	1,600,000	0	
6. 備 品 費	150,000	17,190	132,810	プリンター購入費
7. 消 耗 品 費	100,000	95,048	4,952	封筒、ラベル、コピー代等
8. 支部助成費	420,000	341,870	78,130	
9. 卒業記念費	450,000	430,100	19,900	電波時計230個(予備込)
10. 国際交流基金	200,000	200,330	△ 330	手数料込
11. 懇親会補助費	250,000	57,200	192,800	懇親会チラシ印刷費
12. 支部活動支援費	300,000	200,000	100,000	附属支部及び西宇和・八幡浜支部合同
13. 学部活動支援費	100,000	50,000	50,000	サポーター制度補助(講師代)
14. 雑 費	142,017	130,150	11,867	職員録・環境整備費他
15. 予 備 費	400,000	360,767	39,233	パソコン一式(ノート他)
計	6,562,017	5,709,979	852,038	

残 高 637,231 (次年度への繰り越し)

監査の結果、収支は明瞭で、帳簿の記載及び使途共に正確に処理されており、証拠書類も
完備されていて、適正であることを認めます。

会計監査

令和8年3月20日

宮崎 元希
中大 達雄

令和8年度 予算書

(収入の部)

(単位:円)

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 費	4,100,000	4,100,000	0	予定入会者 (205名)@20,000
2. 寄付・会報送料	50,000	150,000	△ 100,000	寄付金・会報送料等
3. 雑 収 入	530,000	600,000	△ 70,000	定期解約・利息
4. 繰 越 金	637,231	1,712,017	△ 1,074,786	
計	5,317,231	6,562,017	△ 1,244,786	

(支出の部)

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 議 費	100,000	150,000	△ 50,000	支部長会・理事会等
2. 旅 費	380,000	450,000	△ 70,000	支部長会・理事会等
3. 印 刷 費	1,430,000	1,400,000	30,000	会報年2回(封筒印刷込)
4. 通 信 費	250,000	450,000	△ 200,000	会報発送・連絡費
5. 給 与 費	1,600,000	1,600,000	0	事務局二人体制
6. 備 品 費	10,000	150,000	△ 140,000	
7. 消耗品費	40,000	100,000	△ 60,000	インク・タックシール・文具類代等
8. 支部助成費	350,000	420,000	△ 70,000	
9. 卒業記念費	430,000	450,000	△ 20,000	
10. 国際交流基金	200,000	200,000	0	
11. 懇親会補助費	200,000	250,000	△ 50,000	懇親会補助
12. 支部活動支援費	210,000	300,000	△ 90,000	芸能・文化支援等
13. 学部活動支援費	60,000	100,000	△ 40,000	学部サポーター活動支援等
14. 雑 費	37,231	142,017	△ 104,786	学生等謝礼 玄関環境整備費
15. 予 備 費	20,000	400,000	△ 380,000	
計	5,317,231	6,562,017	△ 1,244,786	

※△は減額を示す

愛媛大学教育学部同窓会会則

第1章 総則

第1条 (名称)

本会は、愛媛大学教育学部同窓会と称する。

第2条 (所在地)

本会は、事務局を松山市文京町3番地愛媛大学教育学部事務課内に置く。

第3条 (支部)

本会は、愛媛県下各郡市及び必要と認めるところに支部を置く。

第2章 目的及び事業

第4条 (目的)

本会は、会員相互の親睦向上を図るとともに、母校を支援し、もって教育振興に寄与することを目的とする。

第5条 (事業)

本会は、目的達成のため次の事業を行う。

1 会員の親睦並びに教育振興に関する事業

2 会報発行に関する事業

3 母校の支援に関する事業

4 その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会員

第6条 (会員)

本会は、次の会員をもって組織する。

1 正会員

・愛媛師範学校(男・女)卒業生

・愛媛青年師範学校卒業生

・愛媛大学教育学部卒業生

・愛媛大学大学院教育学研究科等修了生

・母校の現教職員及び旧教職員

・愛媛大学教育学部在学生

・本学部卒業生外の大学院教育学研究科 在学生

第4章 役員

第7条 (役員)

本会には、次の役員を置く。

1 顧問

若干名

2 理事

若干名

3 監事

2名

4 事務局長

1名

5 支部長

各支部1名

6 支部幹事

各支部若干名

第8条 (役員の選任)

顧問は、愛媛大学教育学部長及び同窓会長経験者を推す。

1 会長・副会長・監事は、総会において選任する。

2 理事・事務局長は会長が委嘱する。

4 支部長は、各支部において選任する。
5 支部幹事は、支部長が委嘱する。
第9条 (役員の任期)
会長・副会長・理事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。なお、任期途中で交代した場合は、前任者が残した任期とする。

第10条 (役員の任務)

顧問は本会の主要な事項について諮問に応ずる。

1 会長は、会務を総括する。

2 副会長は、会長を補佐し会長事故あるときはその職務を代行する。

3 常任理事は、常任理事会を組織し、本会の諸事業を企画立案し、理事会の議案に資する。

4 監事は、理事会を組織し、本会の主要事項について協議する。

5 監事は、本会の事業状況及び収支決算状況を監査する。

6 支部長は、各支部の会務を掌る。

7 支部長は、各支部の会務を掌る。

第5章 会議

第11条 (総会)

総会は年1回開催し、支部長会をもって総会に代えることができる。

第12条 (支部長会)

支部長会は、本会の目的達成に必要な事項について協議する。

1 支部長会は、会長が招集し、必要ときは臨時招集することができる。

2 支部長会の議長は、支部長の中から選出する。

第13条 (理事会)

理事会は、年3回(5月・8月・1月)開催し、常任理事会より提出された議案について協議する。

1 理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。

2 理事会の議長は、会長が務める。

第14条 (常任理事会)

常任理事会は、年5回開催し、会則第5条に示された事業の企画立案をし、理事会の議案資料の作成にあたる。

1 常任理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。

2 常任理事会の議長は、事務局長がこれにあたる。

3 常任理事会の議長は、会長が務める。

第6章 会計

第15条

本会の経費は、会費及び寄付金等をもってこれにあてる。

第16条 本会の会費は、入学の際に納めるものとする。

第17条 本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第7章 会則変更

本会の会則を変更するときは、総会の決議を経なければならない。

附則

本会の会則は、令和元年6月8日より実施する。

本会の会則は、令和5年7月8日より実施する。

本会の運営上必要な内規は別に定める。

愛媛大学教育学部同窓会
支部活動支援金交付要綱

第1条

【目的】

この要綱は、愛媛大学教育学部同窓会（以下「愛教同窓会」という。）会長が、「愛教同窓会」活動の振興と支部活動の活性化を図るため、各支部及び支部に属する会員が行う自主的な活動に対して、予算の範囲における支援金交付に必要な事項を定めるものとする。

【支援金申請者】

第2条

本事業の申請者は、支部長とする。

第3条

本事業の対象となる事業活動及び支援金額は審査会（常任理事会）において審議する。

第4条

【支援金申請手続き】

本事業支援金を受けようとする支部及び支部に属する会員は、「愛教同窓会」会長が定める期間内に、下記書類を「愛教同窓会」事務局に提出しなければならない。

(2)(1) 支部活動申請書（様式第1号）
その他、必要と認める添付書類

第5条

【支援金の交付決定】

「愛教同窓会」会長は、前条の規定による申請を受理した場合、その内容をすみやかに審査し、常任理事会の意見を聞いて支援金の交付を決定するものとする。

2

「愛教同窓会」会長は、前項の規定により支援金の交付を決定したとき、すみやかにその旨を申請者に通知するものとする。

【支援金の交付請求】

支援金の交付決定を受けた申請者は、すみやかに支援金交付請求書（様式第2号）を「愛教同窓会」会長に提出しなければならない。

【支援金の支払い】

「愛教同窓会」会長は、申請者から交付請求書の提出があつた場合、書類受理後常任理事会を経て交付する。

第8条

【活動実績報告および決算報告】

支援金を受けた申請者は、支援事業の交付決定にかかる年度の11月30日までに、下記の書類を「愛

第10条

(6)(5)(4)(3)(2)(1)

支援金の交付申請に不正の事実があったとき

支援金を目的以外の用途に使用したとき

支援事業を中止したとき

支援事業を遂行する見込みがなくなつたとき

この要綱に違反したと認めたとき

実績額が支援金交付額に満たないとき

【その他】

【その他】

この要綱に定めるもののほか、支援金交付に関する必要な事項は、「愛教同窓会」会長が別に定める。

[illegible]

(様式第2号)

年 月 日

愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 棟

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部支援金請求書				
活動名				
活動日時	年 月 日() : ~ :			
請 求 金 額				
<u>一金</u> 上記金額を支部支援金として請求いたします。 代表者(担当責任者名) _____ 印 _____				
振込先	金融機関名	支店名	口座名	口座番号

(様式第3号)		年 月 日	
愛媛大学教育学部同窓会 会長 高橋 治郎 様			
愛媛大学教育学部同窓会 支部長 印		支 部 名	
活動予定日時		活動名	
参加会員数	現 座	人	人
(予定数)	〇 B	人	人
報告内容 (会体の様子や会員の様子を簡潔に記入)			
会費の様子	※別添として、会費振込(会員向振込)としてA4 1ページ(1ページを越えても良い)に まとめた報告書票、字数は変えないが、11ポイントを使用 写真枚数は自由		
金計償還	※大きな裏目と裏面記入 詳細は決算書添付のこと 領収書はコピーの裏面で裏出し(裏と表の両面)で良い		
本件連絡先		Email: dooocakad.ahime@gmail.com TEL: 089-227-8383(月・水・金の午前中)	

サークル紹介

アカペラオレンジ



〈サークル紹介〉

皆さん、こんにちは。私たちは愛媛大学公認サークルのアカペラサークル「アカペラオレンジ」です。現在、サークルには五十名を超える部員が所属しており、愛媛大学の中でも大規模を誇る文化系団体として活発に活動しています。「アカペラ」という言葉に馴染みのない方もいるかもしれませんが、これは楽器を一切使わず、人の声だけで音楽を奏でる演奏形態を指します。メインでメロディを歌うリードボーカル、厚みのあるハーモニーを作るコーラス、低音を支えるベース、そしてドラムの役割を担うボイスパーカッション。これら異なる役割の声が一つに重なり、完璧なハーモニーを作り上げた瞬間の感動は、何物にも代えがたいものがあります。

私たちのサークルの魅力は、その門戸の広さにあります。音楽経験者はもちろんですが、大学から音楽を始めたという初心者も非常に多く在籍しています。楽譜が読めなくても、楽器が弾けなくても、歌うことが好きという純粋な気持ちや、新しいことに挑戦してみたいという意欲があれば、誰でも輝ける場所がここに 있습니다。学内や学部の間を越え、共通の目標に向かって切磋琢磨する日々は、大学生活において非常に濃密な時間となっています。

〈音楽で繋がる一年間と活動の核心〉

「アカペラオレンジ」の活動は、単なる日常の練習だけにとどまらず、一年を通じて多種多様なステージが用意されています。活動の大きな柱となるのが、夏と冬に開催されるサークル内ライブです。この日のために各バンドは数ヶ月間かけて練習を重ね、照明や音響が整った本格的なライブス

タジオをお借りして、自分たちの個性を詰め込んだ最高のパフォーマンスを披露します。また、秋に開催される学生祭では、野外ステージや教室内でのライブを行い、キャンパス全体に歌声を響かせます。こうした学内行事に加え、地域に根ざした活動も大切にしており、松山市内のショッピングモールや商店街、さらには福祉施設や幼稚園などから演奏依頼をいただくことも少なくありません。

音楽を通じて地域の方々と直接触れ合い、笑顔を届ける経験は、私たちにとっても大きな糧となっています。

サークル活動の基本となるのは、通常四名から六名で結成される「バンド」単位での練習です。お気に入りのJ-POPや洋楽、あるいは最新のアニメソングなど、自分たちが歌いたい曲を選び、時には自分たちでアレンジを加えながら一曲を完成させていきます。練習の過程では、なかなか音が合わずに苦労することもありますが、何度も声を重ね、お互いにアドバイスを送り合う中で少しずつハーモニーが形になっていきます。この緻密なコミュニケーションの積み重ねこそがアカペラの醍醐味であり、単なる音楽スキルの

向上以上に、仲間との深い信頼関係や協調性を育むことにつながっています。夏終わりに行われる合宿や、ライブ後の打ち上げなど、そうした絆を深める大切な機会となっています。

〈部員の想いと成長〉

実際に活動している部員からは、アカペラを通じて自分自身が変わったという声が多く聞かれます。入学当初は人前で歌うことに抵抗があった学生が、仲間と支え合いながらステージに立つことで自分に自信を持てるようになったり、裏方として音響や運営を支える中で、一つのイベントを作り上げる達成感を知ったりと、その成長の形は様々です。楽器を使わず、自分自身の体そのものが楽器となるアカペラだからこそ、その日の感情や熱量がダイレクトに音に現れます。難しいフレーズを攻略し、全員のピッチがピタツとはまった時の快感は、他では味わえない中毒性のある楽しさです。また、自分たちの歌声をSNSで発信したり、体験会を通じて新入生にハモリの楽しさを伝えたりといった活動も、自分たちの可能性を広げる一助となっています。

〈活動状況と結びに代えて〉

現在は、愛媛大学内の共通教育棟やサークル会館を主な拠点として、日々賑やかに活動を続けています。SNSの公式アカウントでは、練習の様子やライブの告知だけでなく、所属する個性豊かなバンドの演奏動画なども随時公開していますので、興味を持たれた方はぜひ一度覗いてみてください。新入生歓迎会や体験会では、先輩が優しくハモリのコツを教える体験コーナーや、実際にアカペラをしているところを見られる見学会を行っています。歌に自信がある方も、これから新しい自分を見つけてみたい方も、私たちはいつでも歓迎いたします。

最後になりますが、私たちはこれからアカペラという素晴らしい表現を通じて、聴いてくださる方々に感動を届け、地域に彩りを添えられような活動を続けていきたいと考えています。これまで支えてくださった多くの方々への感謝を胸に、松山の街に美しいハーモニーを響かせ続けられるよう、部員一同さらなる高みを目指して精進してまいります。



放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では二〇二六年十月入学生を募集中です。

〈募集期間〉二〇二六年六月十日（水）～二〇二六年九月九日（水）

放送大学はインターネットやテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

- 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。
- 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。
- 放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

資料を無料で差し上げております。

お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。



放送大学



教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2026年度10月入学生募集中！

（2026年9月9日まで）

問合せ先 愛媛学習センター

TEL 089-923-8544



●インターネットで資料請求・出願できます。

放送大学 www.ouj.ac.jp

●資料請求はこちら（総合受付）

☎043-276-5111

会報送付停止等について

会報送付の停止を希望する場合には、下記の2つの方法があります。

① 送料を振込み、事務局から送付している場合

会報表紙に記載されている事務局に連絡いただければ、次の号から送付が停止します。なお、連絡の際には封筒に貼ってある氏名右下にあるID番号とお名前をお伝えください。事務局員は、基本月から金の午前中業務についています。これらの日以外は留守電対応となりますので、特にID番号をお伝えください。

② 校区の小学校から送付されている場合

住まわれている住所を校区とする小学校の「愛媛大学教育学部同窓会担当者」に連絡すれば、会報の送付は停止します。事務局に連絡いただいても構いませんが、その際には「氏名と校区小学校」をお伝えください。事務局から該当小学校担当者に連絡いたします。

③ 会報が2部届く場合

会報が2部届く場合があるかと思いますが、事務局からと校区小学校から届いていると考えられます。前述のように事務局から送付している場合は、送料が振り込まれている会員となりますので、恐れ入りますが校区小学校担当者に連絡をして停止をお願いしてください。

④ 住所が変わった場合

住所が変わった場合には、事務局まで連絡をお願いいたします。また、送付しても2号（回）続けて「住所不明」で返送されてきた場合には、送付を停止しております。

「最近会報が届かない」と言われる場合は事務局に連絡をお願いします。

※ 事務局が留守電対応になっている場合は、折り返し確認の連絡をいたしますので、連絡先をお知らせください。

創基150周年記念
第20回愛媛大学教育学部同窓会懇親会

参加者募集

今回の懇親会は愛媛県に教員養成機関が設置されて150周年にあたることを記念して実施いたします。ぜひ、ご参加ください

日時 令和8年8月22日（土）

会場 ネストホテル松山
（旧松山ワシントンホテルプラザ）
松山市二番町1丁目7番1号
☎089-945-8111

会費 6,000円（当日会場にて集金）

連絡先

☎ 790-0855
松山市文京町3番
愛媛大学教育学部同窓会事務局
☎089-927-9383
E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com

締切日
令和8年
7月31日（金）

申込方法

電話での申し込み

- 1 氏 名 ※
 - 2 卒業年 ※
 - 3 住 所
 - 4 連絡方法 ※
- ※印は必須事項

上記内容をお知らせください。
事務局は、月～金の午前中
業務についています。不在
の場合や午後につきましては
留守電対応になります。
留守電の場合は折り返し確
認の連絡をいたしますので、
連絡先（電話番号）を入れて
おいてください。

メールでの申し込み

- 1 氏 名 ※
 - 2 卒業年 ※
 - 3 住 所
 - 4 連絡方法 ※
- ※印は必須事項

上記内容をお知らせく
ださい

QRコードでの申し込み

下記コードからアクセ
スいただき、所定の項
目にご記入ください



申し込みをいただいた会員の方には数日以内
に必ず事務局より確認の連絡をいたします。
確認連絡がない場合には、恐れいりますが事
務局にお問い合わせください。



祝・叙勲

(令和八年四月二十九日)

春の叙勲

☆瑞宝双光章

地方自治功勞

教育功勞

笹山 允 様

教育功勞

亀田 勝豊 様

敬弔

(物故会員)

(死亡年月日)

(氏 名)

6・11・12

村田 忠男

(昭27・愛大)

7・5・9

合田 昌文

(不明)

7・8・22

丹下 友和

(昭23・愛師)

7・8・26

岡本 良直

(平2・愛大)

7・11・24

窪 久江

(昭29・愛大)

7・12・3

井上 静彦

(昭35・愛大)

7・12・29

濱田 直

(昭35・愛大)

8・1・2

向井イソカ

(昭11・女師)

(死亡年月日)

(氏 名)

8・1・5

井上 利彦

(昭29・愛大)

8・1・8

佐伯 雅博

(昭33・愛大)

8・1・10

佐土志保子

(昭36・愛大)

8・1・13

大野 睦郎

(昭34・愛大)

8・1・14

近藤 晋

(昭32・愛大)

8・1・22

近藤 朝男

(昭32・愛大)

8・1・27

泉 米子

(昭28・愛大)

8・1・29

水谷 恒

(昭23・愛師)

8・1・30

高木 敏雄

(昭19・愛師)

(死亡年月日)

(氏 名)

8・2・12

今川 慶夫

(昭26・愛大)

8・2・12

越智 仁

(昭27・愛大)

8・2・14

永井 一見

(昭22・愛師)

8・2・21

内藤 晴夫

(昭29・愛大)

8・2・23

山下ルリ子

(昭26・愛大)

8・3・19

渡邊 忠廣

(昭28・愛大)

8・3・29

門屋 映章

(昭22・愛師)

8・4・4

藤岡 正義

(昭30・愛大)



創基150周年記念号 会報143号思い出原稿募集



教育学部事務局では、創基150周年記念号（会報143号）の思い出原稿を募集しています。

執筆要領

内容：教育学部時代の先生や授業のエピソードor学内の様子等を
自由にお書きください
字数：400字詰原稿用紙2枚半程度
(1000文字を目安：写真等含)
締切：令和8年10月31日（土）
提出方法：メール添付
or
紙媒体の郵送

お願い

締め切りを過ぎる場合は、投稿予定であることを事務局にご連絡ください。
掲載枠を確保してお待ちいたします

提出先

☎ 790-0855
松山市文京町3番
愛媛大学教育学部同窓会事務局
☎ 089-927-9383
E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com



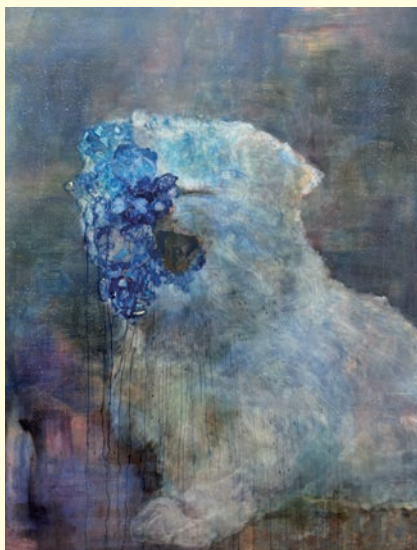
よろしくお願いします

準会員作品紹介

掲載の写真は準会員の皆さんの作品です。今後も準会員の皆さんの作品を紹介していきたいと思います。



渡邊 涼香
Last Piece



前田 清葉
僕はパパとママの子



榎 美晴
収 穫